

「北斗句会 令和2年12月定例会（メール句会）選句」

森田光彦

特選

NO. 35 光秀の御領神社や虎落笛

光秀を慕った当時の領民の悲しみが伝わってくるようです。季語の「虎落笛」が効いています。

選

NO. 16 日めくりの十一月の晦日かな

年を取ると、月日の立つのがとてもはやく感じられる。その気持ちが、「日めくりの十一月の晦日」に上手に表現されています。

NO. 25 銀杏落葉踏む足裏の落ちつかず

銀杏落葉を踏みつけたときの、滑りそうな不安定な様子、措辞が見事です。

NO. 30 くるくと時計まはりに鴨の恋

ほのぼのとした可愛らしさを感じます。状況が見えるようです。

NO. 32 大根を洗ふ手の香や母のこと

子供のころ、川で母と大根を洗ったことがあるが、手に付いた大根の葉の匂いを思い出しました。「母のこと」の語句がすばらしい。

藤田紀潮

特選。

NO. 29 さくさくと落葉踏む音背が聞く

（自身が踏む落ち葉の音を耳ではなく背で聞くとした、俳人らしい感性。）

選。

NO. 4 古書店を巡る一日や一葉忌

（葉の付く季語で一葉忌に飛ばした発想が良い。）

NO. 11 冬もみじ老耄けはい音もなく

（「老耄けはい音もなく」が秀逸。）

NO. 26 コロナ禍にエールを送る酉の市

（コロナ禍の世に、工夫を凝らしながら酉の市。エールは売子の声、朝ドラに因む熊手それとも手締めか。）

NO. 30 くるくと時計まはりに鴨の恋

（観察眼の効いた句。）

太田黒幸風

特選

NO. 39 丸き背の喪服に長き木の葉髪

高齢の女性でしょうかー、喪服に木の葉髪が良くついて
悲しい光景が浮かびます。

選

NO. 8 木の葉散る武蔵野原や薄香色

秋の武蔵野原の夕方の光景が目に浮かびます。

NO. 12 憂国の血潮めきたる冬夕焼

三島由紀夫の没後 50 周年で、彼の記事が多く出ています、
亡くなった彼の血潮の色が目に浮かびます。

NO. 24 タと闇狭間を仕切る冬の星

夕方から夜に向かう頃星が良く輝いて見えます、これを狭間を仕切る 表現した
のが妙

NO. 35 光秀の御領神社や虎落笛

光秀を偲ぶような虎落笛が彼を吊うのによくついている。

山縣秀雄

特選

NO. 11 冬もみじ老耄けはい音もなく

上五と中七の取り合わせが寂しい状況を良く表現しており、景が読める。
ひらがなの使い方がうまい。

選

NO. 4 古書店を巡る一日や一葉忌

一日と一葉忌の「一」の対比が面白くて良い。

NO. 27 焼芋や無駄なひと日をこそ愛す

焼芋と無駄な日を過ごすことが幸せを思わせる景であり、特に「こそ」の強調が
良い。

NO. 34 くつさめも咎める世なり車内の眼

季語「くつさめ」の使用がコロナ禍の時節柄実情を表しており、時事句として良
い。

NO. 39 丸き背の喪服に長き木の葉髪

上五が年長者を思わせ、下五の季語と良くマッチして景が読めて良い。

吉岡誠山

特選

NO. 3 4 くつさめも咎める世なり車内の眼

コロナ過で、くしゃみも真面に出来ない余裕もない世の中の様子を謡っており素晴らしい。

選

NO. 1 2 憂国の血潮めきたる冬夕焼

冬夕焼けを見て、昔の憂国を思い出し、軟弱化した当世を心配している様子が良くわかる。

NO. 25 銀杏落葉踏む足裏の落ちつかず

何時もは大事に押し葉などしているのに、踏んでいくなど出来ないよと戸惑っている。

NO. 4 1 コロナ過や津々浦々の隙間風

コロナ過で、世の中のユタっとしたところがなくなり、住みにくくなってしまった。

NO. 4 2 焼き芋の稚児と頬張る甘さかな

竹内雲泉

特選

NO. 12 憂国の血潮めきたる冬夕焼

若さがいつの時代も国の将来を憂え、気は滾る。冬の空は清んでおり、夕焼けは寸時真っ赤で極めて美しい。「血潮めきたる」が効いている。

選

NO. 4 古書店を巡る一日や一葉忌

のんびりとした一日の古本屋巡り。

古書店と一葉忌が響き合っていて良いと思います。

NO. 25 銀杏落葉踏む足裏の落ちつかず

「外苑の銀杏落葉」を思い出します。この時期一面絨毯の様に美しく散り積もっています。踏み込むのは気が退け、落ち着かない感じが・・・。

NO. 27 焼き芋や無駄なひと日をこそ愛す

この焼き芋は、焼いているところ？食べているところ？

のんびりした日、これこそが大切。「縁側で食べながら」だと思います。

NO. 34 くつさめも咎める世なり車内の眼

普段は嫌な気分になれる時の車内の眼ですが、上五の「も」で、この句の背景にはコロナ禍があり、よく観察されていて良いと思います。

大森康正

特選

NO. 39 丸き背の喪服に長き木の葉髪

ご焼香でしょうか。老女の姿を通し、悄然とした葬儀の雰囲気が見られる。下五により別れの侘しさが助長された。

普通選

NO. 3 掃き溜めし枯葉を散らすつむじ風

誰もが思い当たる光景である。単純明快

NO. 11 冬もみじ老耄けはい音もなく

作者は老いを感じるようになり、日常の気掛かりを一句にした。季語の取り合わせが的確。

NO. 16 日めくりの十一月の晦日かな

明日は年の末月、この日を特別な日と位置づけた心境に賛同。

NO. 35 光秀の御領神社や虎落笛

今年故に（NHK 大河ドラマ）光秀に対する連想が膨らむ。「虎落笛」は追討される身となった境遇に修辭。

大崎石州

特選

NO. 30 くるくると時計まはりに鴨の恋

情景が良い。上五中七の言葉で加茂の必死さが伝わってくる。

選

NO. 1 冬空の梢際立つ櫂かな

「冬空の」は「冬空に」が良いのではないか。櫂の有様が表現されているが、

少しありきたり・。

NO. 3 履き溜めし枯葉を散らすつむじ風

枯葉を履き溜める庭のある御仁が羨ましい。

NO. 14 八十路とはかくありたしや枯櫂

葉を落としてもなおかつ寒風にスックと立つ櫂に、我が身もそうありたいと願う気持ちが表れていて面白い。

NO. 38 箱開けて香る林檎や幸つつみ

送られてきた林檎の箱を開けると、香りが漂い幸せな気持ちになる。送り主の気持ちも伝わってくる。

田中資凡

特選

NO. 12 憂国の血潮めきたる冬夕焼

憂国の思いと赤く染まる冬夕焼の対置が巧み。中七の措辞により、情景と心情が融合し、句を引き立たせている。

選

NO. 2 見舞とて焼芋を手に娘来る

娘が見舞いに焼芋を持ってくるというのは面白い。焼芋を食し、昔話など楽しい一日であったろうと想起させる。

NO. 15 早朝散歩イヴモンタンの枯葉

破調ながら、イヴモンタンのシャンソンを口ずさみながらの散歩、心地よい句。

NO. 31 八十の身を肩口深く冬至の湯

冬至の湯に浸かり、八十の身の何を思うのか、肩口深くの措辞が巧み。

NO. 38 箱開けて香る林檎や幸つつみ

贈られてきた林檎の箱を開けての香りに感激、幸つつみの措辞に深い思い連想させる。

宮下ひかる

特選

NO. 36 目的を持ちて飛ぶのか冬の蝶

自分のウォーキングがそのものずばり、見透かれた。

選

NO. 2 見舞とて焼芋を手に娘来る

やさしい親子関係、独り者には、うらやましい限り。

NO. 5 愛犬と落ち葉踏み行く散歩みち

ウォーキング中に、よく見る風景、貴君も同様か

NO. 18 枯蓮の日差し一層目立ちけり

老境の身なれば、若者にはない一層感じ取れる風景。

NO. 25 銀杏落葉踏む足裏の落ちつかず

些細なことでも、気になりだしたかな～、誰かも同じ。

深見十万

特選

NO. 24 「夕と宵・・・」の句 まさに星が夜の世界に入るのを仕切っているようだ。

選

NO. 9 「溪谷の・・・」の句

紅葉の綺麗な景

NO. 12 「憂国の・・・」の句

「三島の忌」を思い出す

- NO. 34 「くつさめも・」の句 確かに風邪を引いたら大変
- NO. 38 「箱あけて・」の句 お歳暮のシーズンですね